

識別番号	P 1 7
研究課題	現代ヨーロッパ社会の現状と課題
研究代表者	中村雅治（ヨーロッパ研究所・フランス語学科）
共同研究者	ライノルト・オブヒュルス＝鹿島（ドイツ語学科）、ジャン＝クロード・オロリッシュ（ドイツ語学科）、木村護郎クリストフ（ドイツ語学科）、小泉進（ドイツ文学科）
Summary	The European Institute was founded in April 2007 to succeed the Institute for the Culture of German Speaking Areas. Our main fields of study are: the integration of the EU, films on immigration into Europe, and the Sociology of European languages. In 2007, we held three symposiums in each field and another related to modernity in literature.

本学ヨーロッパ研究所は、ドイツ語圏文化研究所を母体として 2007 年 4 月に開設された。その際研究所が今後重点的に取り組むべきテーマとして、1) EU 統合、2) ヨーロッパ統合における映画、3) ヨーロッパ言語社会学の 3 つを決定した。そして 2007 年度には、この研究テーマに沿って 3 つのシンポジウムが企画・開催された。なおそれとは別に独立したテーマを掲げるシンポジウム 1 つも開かれた。

1. ヨーロッパ映画における移民たち—移民問題をみる—

開催日：2007 年 5 月 12 日、10 月 17 日、11 月 28 日、12 月 5 日

研究代表者：ジャン＝クロード・オロリッシュ（ドイツ語学科）、
ライノルト・オブヒュルス＝鹿島（ドイツ語学科）、真鍋正紀（本学非常勤講師）

※本シンポジウムは「日本・EU フレンドシップ・ウィーク」協賛行事として行われた。

フランスやドイツにおける「スカーフ論争」や、ヨーロッパ諸国へ流入する不法入国者・不法滞在者問題をはじめとして、移民はヨーロッパ社会に影響を与え続けており、テーマとしての「移民」は大きな関心を集めている。映画メディアはこのテーマをどのように写し取り、あるいは文字通り「映し撮って」いるのだろうか。ここでは、映画メディアにおける移民たちはどのようなステレオタイプやモデルによって、いかなる語り口で描き出されているのか、また誰の視線で、何がそこでは写しとられているのかを、分析の対象とする。すでにイギリス映画界、さらにハリウッドで成功しているスティーブン・フリーアーズ(Stephen Frears)をはじめ、近年高い評価を受けているトルコ系移民二世代の監督ファティフ・アキン(Fatih Akin)のほかにも、これまでたくさんの監督が「移民」を素材に映像作品を製作している。ネーションごとに異なる発展を遂げてきたヨーロッパ映画の歴史を踏まえ、「移民」を扱った複数の映像作品の差異と共通点を見出し、この問題圏の全体像を提示していくことを、本シンポジウムでは試みた。

報告者は多数に上る。学外からは狩野良規（青山学院大学）、ゴードン・ガムリン（ロヨラ・マリーマウント大学）、ジゼラ・ドイ（京都女子大学）、渋谷哲也（東京国際大学）など。また学内からは研究代表者に加えて、ジョン・ウィリアムズ（英語学科）、マウロ・ネーヴェス（ポルトガル語学科）、長谷川イザベル（フランス語学科（当時））、吉村和明（フランス文学科）、村田真一（ロシア語学科）などが参加した。

2. ヨーロッパ統合の現状と課題—EUと構成国の現状を多角的に分析する—

開催日：2007年6月29日、30日

企画代表者：ジャン＝クロード・オロリッシュ（ドイツ語学科）、中村雅治（フランス語学科）、河崎健（ドイツ語学科）

本シンポジウムは大きく分けて3つの部分からなる。第1セッションは、2007年4月末から5月初めにかけて行われたフランス大統領選挙前後のフランスの政治・経済・文化状況を取り上げ、ヨーロッパ統合問題と関連づけながら分析を試みたものである。

第2セッションは、2007年がローマ条約調印50周年にあたることから、ヨーロッパ統合が成し遂げたこと、現在の課題などを取り上げた。21世紀初めのヨーロッパで進行するアクチュアルな話題を論じることで、半世紀にわたる統合の歴史的発展の経緯を振り返り、今後のヨーロッパを考察するために有用ないくつかの視点を提供しようとした。第3セッションは国内社会のヨーロッパ化の現象を取り上げた。以下にプログラムを載せておく。なおシンポジウムの結果は、ヨーロッパ研究所の研究叢書第1巻『ヨーロッパ統合の現状と課題』（2008年3月）として出版された。

6月29日（金）

第一セッション：大統領選挙後のフランスとヨーロッパ（14:00～17:30）

- 「2007年大統領選挙のフランス」 中村雅治（上智大学）
「グローバル化の中のフランス経済—大統領選挙後の争点」 J.L.ムキエリ（パリ第1大学）
「共和国、ライシテ、サンパピエ—一つの事例から」 水林 章（上智大学）
「欧州地域政策とフランスのガバナンス」 久邇良子（東京学芸大学）

6月30日（土）

第二セッション：ローマ条約調印50周年のヨーロッパ（9:00～12:30）

- 「ヨーロッパの文化的多元性」 J.-C.オロリッシュ（上智大学）
「欧州経済のグローバル化と新産業政策」 長部重康（法政大学）
「大統領選挙後のフランスのヨーロッパ政策」 C.ルケンヌ（CERI—LSE）

第三セッション：国内社会のヨーロッパ化（14:00～17:30）

- 「ドイツとEU・理性から発する情熱」 M.-P.メル（ハルツォグホルスト大学）
「ヨーロッパとイスラーム—何が共約不可能なのか」 内藤正典（一橋大学）
「EUと国内政治～加盟国国内政治過程の「ヨーロッパ化」をめぐる～」
河崎 健（上智大学）

3. ヨーロッパ言語とアジア圏—言語政策の過去・現在・未来—

開催日：2007年8月2日、3日

本シンポジウムは第5回目の新渡戸記念国際シンポジウムを上智大学に誘致し、本学ヨーロッパ研究所の設立行事の一つとして開催されたものである。このシンポジウムは異なる地域の言語

政策の専門家が議論を深める機会を提供することを目的として、オランダの世界言語問題調査・記録センターが中心となって、世界各地で開いてきたものである。今回はアジア諸国の言語政策においてヨーロッパ言語が果たした役割および今後の展望についてさまざまな議論が行われた。

今回のシンポジウムにおいては、アジア諸国の言語政策においてヨーロッパ言語が果たしてきた役割および今後の展望についてさまざまな角度から議論が行われた。

初日は、ヨーロッパ言語とアジア言語の接触（J. C. オロリッシュ、ヨーロッパ研究所長（当時）、今回の新渡戸シンポジウムの位置づけ（H. トンキン、CED代表）、新渡戸稲造の「架け橋」の思想（佐藤全弘、大阪市立大学名誉教授）に関する三つの導入講演の後、アジアにおける「言語政策の課題と挑戦」、「ヨーロッパ言語の役割と展望」の二セッションが続いた。

翌日は「英語の土着化と抵抗」、「アイデンティティ、トランスナショナリズムと言語権」、「多様性の尊重と橋渡しの可能性」の三セッションが行われた。

E. アナマライ（インド言語中央研究所、イェール大学）、T. スクトナブ＝カンガス（ロスキレ大学）、R. バルダウフ（クイーンズランド大学）、馮志偉（中国教育部）、庄司博史（国立民族学博物館）、田中克彦（一橋大学）、平高史也（慶應義塾大学）など言語政策研究の第一線で活躍する学外の研究者とともに、本研究所からは泉邦寿（フランス語学科）、市之瀬敦（ポルトガル語学科）、木村護郎クリストフ（ドイツ語学科）がパネリストとして参加した。

4. 文学のパラダイムとしてのモダン

開催日：2008年3月15日、16日

学内共同研究「文学におけるモダンとはなにか」（2006－2008年度）との関連で本シンポジウムは開催された。

文学における「モダン」について問うことは、1）文学にとっての「新しさ」「機能性」が持つ意義について問うことにつながる。その背後には、「古いもの」に価値を見出し、それを受け継いでいくことをよしとする立場と、「新しいもの」にこそ価値があると考え、それによって「古いもの」を克服しようとする立場との、文化全体に関わる2つの立場のせめぎ合いがある。したがって、文学における「モダン」について問うことは、2）文学が思想として「近代」を、どのように受け止め、どう判断したかを明らかにする作業でもある。

上記の1）、2）について問うことは、3）「文学」と「近代」の本質的特徴について解明する作業となる。その際、ゲオルク・ジンメルが『貨幣論』において指摘した、「古代」と「近代」の思考の特徴は、本共同研究の作業仮説として位置づけられる。すなわちジンメルによれば、4）「古代」においては「実質」「実体」をともなった「存在」、「物そのもの」が世界を構成しているのに対して、「近代」においては「抽象化」「機能化」された「代替物」「記号」（＝貨幣）が世界を構成するのである。

以上の前提に基づき、本共同研究は、「モダン」の概念を、20世紀の「モダニズム」に限定せず、通時的・歴史的視点をも加えることにより、「モダン」の意味内容を立体的に浮かび上がらせようとする試みである。

当日のプログラムは以下のとおりである。

3月15日

11：00 本田博之 「なんのために人間が？」 シラーにおけるモデルネ

- 11:50 真鍋正紀 H・v・クライストにおけるパラダイム・ロストとパラダイス・ロスト
—模範が喪失した世界としての近代—
- 12:35 休憩
- 13:40 志村哲也 モダン・レジェンドと文学—ハイネの『ローレライ』を例に
- 14:30 磯崎康太郎 シュティフターの「近代性」とベンヤミンによる解釈
- 15:20 休憩
- 15:40 桑田 文 A. デーブリーンのモデルネ
- 16:30 宍戸節太郎 近代的「個人」の戯画—エリアス・カネッティの小説『眩暈』における
パラダイム転換

3月16日

- 9:30 Hiroyuki HONDA „Wozu Menschen?“ Zur Modernität bei Schiller
- 9:55 Susumu KOIZUMI Goethes „Wahlverwandtschaften“ und die Moderne
- 10:20 Masanori MANABE Das verlorene Paradies und Moderne als Paradigmenverlust
bei Kleist
- 10:45 Tetsya SHIMURA Heines Lore Lay als moderne Legende
- 11:10 Kotaro ISOZAKI Die „Modernität“ Adalbert Stifters und ihre Interpretation durch
Walter Benjamin
- 11:35 Yumiko KATO
Die Funktion der „Neuen Deutschen Beiträge“ im Hinblick auf den
idealen Leser bei Hofmannsthal
- 11:55 Aya KUMEDA Die Moderne bei Alfred Döblin
- 12:20 Mittagspause
- 13:20 Fumito HAYAKAWA
Der suspendierte Tod in der Moderne. Die Vergil- und Bertrand-Figur in den
Romanen von Hermann Broch
- 13:45 Masaya WATANABE Gesellschaftliche Realität bei J. R. Becher und G. Benn
- 14:10 Setsutaro SHISHIDO
Die Karikatur des modernen Individuums. Zu Elias Canettis Roman
„Die Blendung“
- 14:35 Christian ZEMSAUER Karl Kraus im Kontext der literarischen Sprachreflexion
der Moderne
- 15:35 Kaffeepause
- 15:50 平野 嘉彦 (Yoshihiko HIRANO) ベンヤミンと筆跡学 (Benjamin und Graphologie)
- 16:50 Nikolaus MÜLLER-SCHÖLL (Universität Gießen)
„Heiterer Weise die Tropen durchkreuzend“ - über eine Textpassage in
Paul Celans „Meridian“-Rede
- 17:50 Abschlußdiskussion